

子供たちに自然を返そう

石塚 和子

石塚助産院((奈良県)

子供たちへの贈り物とは

子供たちの社会化は、直接的には家族がその要因となるが、自然環境の中での遊びもまた子供の社会化を促すものである。しかし家に親がいない、外に自然がない、勉強に追いたてられる。子供が汗を流して思いっきり遊んでいる姿はめずらしい場面になってしまった。

私は小学生の頃、中国の、黄海に面した山東省の青島で育った。

裏山で日が暮れるまでかけ回り、中国人の土葬の有りさまをみて人々と共に涙を流し、气象台のおじさんとおにごっこや缶蹴りをして、あたりが暗くなるのを忘れていた。思えば、懐しく、今でも胸がはずむ思いである。

自然は子供であった私に何を与えてくれたのだろうか、少しばかりの感傷と共にふりかえってみた。自然が与えてくれたもの、それは生きていく力であったように思う。

膝をすりむき、鼻血を出してもなお、丘を登り、崖をすべり降りて、正義の王者になったつもりで、男の子たちのけんかの仲裁をしたりしていい気になっていた。ラーメンの屋台を引くおじさんの超薄切り焼き玉子に目をみはり、そしてまた、中国の人の結婚式に馳せ参じ、新郎新婦しか乗ってはいけ^はない赤いじゅうたんの上を歩いたために衿首をもってつまみ出された、あの胸ふくらむ思いは、懐しいというよりも今では私の宝物になってしまっている。

今の子供たちは何を^はして遊んでいるのだろうか。

日の当たらない室内で、パソコンやゲームに興じて、生きていく勇氣にはつながらないだろう。

骨がもろくなるのも無理はない。親の考えに感心させられたりする説教の場面はあるのだろうか。そして父親とゆっくり話をするチャンスはあるのだろうか。汗と油で顔をくちゃくちゃにして、枯れ枝を振り回し追いかけてっこをしたことがあるのだろうか。

次の世代を受けついでいく子供たちへの贈り物とは何を意味するのか、もう一度考え直したい。

それは、身体^はの健康と共に心の健康を保ち、たくましく生きていくためにたくわえておかねばならないエネルギーではないだろうか。

今後ますます、世の中はめまぐるしく変わっていくだろう。それを前提にして思うことは、みずから多様な生き方ができる素材をもっていた方がよいということである。

「遊びから得るものは、好奇心と仲間関係」

「けんかから得るものは、何くそという底ぢから」

「スポーツから得るものは、ルールの大切さ」

「家事手伝いから得るものは、思いやりと工夫とそして物ごとの優先順位」

等々、子供たちは家で^はの日常生活にとけこんでいれば多くの教訓を見ききすることができるのである。

自然との結びつき

電話とファックスと交通機関の発達^はは便利なのに思うが、実は忙しくなりすぎた結果の産物なのだろう。最近、新聞や雑誌で見る「アウトドア」とは何のことかと思えば、まるで外で楽しむための道具をいっているかのようだがっかりする。

物質主義があちこちで顔を出し、本来の姿から



遠ざかっている。

自分の幼い頃の思い出をたどると、中国の一般的な家は粘土をこねて作ったブロックを積み重ねて築かれていたようだ。粘土の中にまぜたワラはセメントのような役割をはたしていたと思われる。また、雪が降るとムシロで編んだような靴をはき、魚が食べたくないと海へ出かけ、肉は馬肉と豚肉が主流をしめていた。丸はだかで店頭にぶらさがっているニワトリにはいささか閉口したものだ。

そのような生活の中で、人間は本来、自然の中で、自然界の動植物と均衡を保ちながら生活していくものだ、という感覚をいつの間にか身につけ、そして自然は大切にしなければならないことを教えられた。

車などのない時代のこと、手足のじんじんする寒い日もシモヤケの足を引きずりながら学校の門をくぐった思い出。夏期は毎日学校行事として海水浴があった。クラゲに肌をさされ、カニに足をはさまれ、海の中でのボール遊びでは、肩からはずれた水着なんてものともせずボールに突進していた。

このように自然の中でたわむれ、自然の尊さも自然のこわさも、生命への恵みとして受けることができた。

太陽の光と土と緑を子供たちに

地域の開業助産婦が自然出産を大切にし、女性に与えられた自然の恵みを最大限に活用しようと努力するのは、人間の性の自然とは何か、そしてまた性の尊厳とは何かを、仕事を通じて思い知らされているからでもある。

今ここに、母子保健のかぎりない発展とそして理想を考えると、自然界のできごとを子供たちの目に入れてやりたい、そして自然の恵みを感じとらせてやりたいと思う。自然環境は生命の大切さ、生命への限りない思いやりと、そして何よりも生きていく力を与えてくれる。

21世紀にむけ、どんな社会がやってこようとも生きぬく力を身につけることは、他のさまざまな学習より大切であると思う。

近年、アトピーからエイズにいたるまで、不自然な生活のつけが回ってきたように思える。

野の草花に一時を忘れ、動物とたわむれる子供たちに声援を送りたい。手のひらに土をのせ、土は草花の新しい芽と青々と生長する野菜を作ってくれるのだということを実感させる教育が必要である。

土の中に生きる微生物は、人間ばかりでなく生きるものすべてに多くの恩恵を与えていることは誰もが知っている。しかし今、だんだんと土がなくなり化学合成物質の肥料で作られた農作物が蔓延している。

未来を受けつぐ子供たちのことを考えれば、何とかして太陽の光と自然環境を残すことに努力しなくてはならない。

子供たちに太陽の光と土と緑を、と願ってやまない毎日である。

* * *

さて、バトンタッチを大阪の開業助産婦、正木かよ先生にお願いしたいと思います。

先生は自然を何より尊び、人々に勇気を与え、助産婦活動に平素から指針を与えて下さっております。